

小学校音楽科における積み上げを図るための具体的方策

—音楽づくりと鑑賞の関連を図った題材を通して—

M14EP012

原田 弘昭

中学校音楽科教員 43 名

期 間：2015 年 8 月～12 月

設問内容・設問数・回答所要時間

①小学校教員：音楽科全般と領域（歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞）ごと、計 31 問、回答所要時間約 10 分～15 分

②中学校音楽科教員：音楽科全般と小学校教員に対する要望、小中連携について、創作力くらの扱いについて、計 10 問、回答所要時間約 10 分

（2）結果と考察

①小学校教員アンケートから

音楽科指導に関わる研修を受講したことがない割合が半数を占めていた。およそ半数の教員は、採用されてから音楽科に関わる研修を一度も受講していない。さらに、平成 20 年の学習指導要領音楽編に登場した〔共通事項〕についても「知らない」と答えた教員が 3 割を占めている。

音楽づくりでは、取り組んでいないと答えた教員が 1 割いた。アンケートの音楽づくりで困っていることについても、音楽づくりの知識がない、指導に時間がかかる、評価の難しさ、音符・リズムが分からない子への対応に時間がかかり難しい、と答えている。

鑑賞の年間の回数は、5 回以下と答えた教員が 4 割いた。鑑賞曲から得た知識や技法を自分たちの表現方法に生かす活動を小学校段階から仕組んでいきたいのだが、この回数をみると、学期に 1 回程度しか鑑賞曲を聴かせていないと考えられる。実際、鑑賞の授業の進め方についても「聴かせるのみ」または「聴かせて感想を書かせる」という指導を行っている教員が 6 割を占めている。鑑賞で困って

1. 問題

山梨県内の小学校の多くは学級担任が音楽を指導しているが、音楽を研究教科として指導している教員の割合は低い。以前より、山梨県の小学校教員が、音楽科の授業をどのように組み立てていけばよいかわからないということをよく耳にすることがあった。また、昨年度の中学校での実習時における 5 月の 1 年生の実態を見ると、進学してきた小学校ごとで音楽的能力に大きな差があることに気づいた。小学校ごとでの指導のばらつきや個人の音楽的レディネスの不十分さ、学習の積み上げの不十分さがあることを改めて知り、中学校教員の指導の大変さを目の当たりにした。

そこで今年度、このような実態を踏まえ山梨県の小学校教員を対象にした音楽科指導におけるアンケートを行い、現場の教員が何に悩み、困っているのかを調査してみたいと考えた。併せて、中学校音楽科教員へのアンケートも行い、小学校で身に付けてきてほしい力はどのようなものであるのかについて調べたいと考えた。

本研究の目的は、アンケートの結果を分析し、そこから見える課題を明らかにする中で、小学校音楽科における指導及び学習の積み上げを図るための具体的方策を提案することである。

2. アンケート

（1）方法

対象者：山梨県の公立小学校教員及び公立中学校教員

依頼方法：直接お会いした時依頼し、質問紙へ記入してもらった

回答人数：小学校教員 54 名

いることとして、ただ感想を書くだけになってしまっていて評価が難しい、教材・資料作りが大変、個人の音楽的レディネスの差が大きい、といった回答があった。

②中学校音楽科教員アンケートから

山梨県の中学校数の半数を超える音楽科教員から得た結果は、入学してくる生徒の実態として、学習内容が定着していないと感じた記述は、7割を占める。なかには、「音楽の授業は、合唱練習のための授業だと感じている生徒がいる」という記述もあった。音楽科教員は、音楽が好きということだけではなく、音符の概念を理解してほしいこと、読譜がある程度できてほしいこと、小学校で音楽づくりの経験をきちんと積んでほしい、〔共通事項〕を聴き取ることができるようになってほしい、ということを感じている。

(図 1)

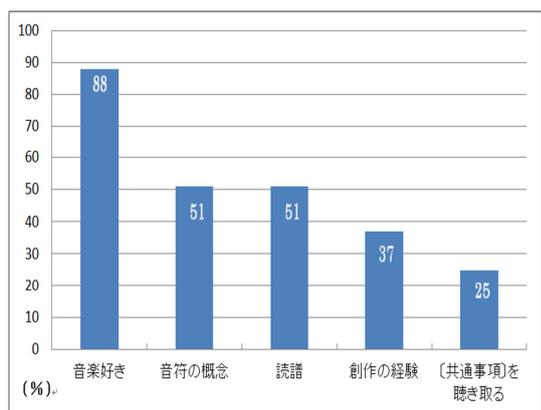


図 1 中学校音楽科教員アンケート 小学校でこれだけはきちんと身に付けてきてほしいこと

③小中学校アンケートのまとめ

小学校における音楽科の授業は、個々の教師によって指導観及び指導技術に差があることが明らかとなった。「活動あって学習なし」という音楽の授業では、教科としての存在が薄れてしまう。特に中学校の創作においては、生徒たちに音符の概念がなく、さらに小学校での創作の経験がほとんどない生徒の実態から、中学校の音楽科教員が小学校の発展的内容の活動を仕組むことができず、小学校段階

に立ち戻って、音符の概念の説明をしたり、リズム遊びなどの小学校段階でも行うような指導をし直したりしている実情がある。

音楽科は、他教科のように、特に小学校低学年の段階から、音符の概念や拍節感、音楽づくりの経験をきちんと積み重ねていかなければならないと考える。また、小学校教員の意識改革も必要だが、具体的な教科の指導法を学ぶ機会も必要だと考える。

小学校教員を対象としたアンケートから、音楽づくりと鑑賞の指導に大きな課題があると感じた。音楽科が専門でない教員は、音楽づくりが平成 20 年学習指導要領から導入された新しい領域であったり、鑑賞曲のどの部分をどのように聴かせるのか難しいと感じたりしている。教員は音楽科における教材研究が難しいと感じ、学習課題をどの程度に設定し子ども達に音楽づくりや鑑賞をさせるのかがわからない、また、学習のねらいが定まらないので評価もできないのではないだろうか。または、校務多忙のため音楽科の教材研究まで手が回らない、ということも考えられる。

両者のアンケートから、小学校における〔共通事項〕を意識した音楽づくりと鑑賞の指導の充実を図ることの重要性、及び、音楽記号の理解や音符の概念・読譜・リズム感覚を養う必要性が明らかとなった。分析結果から、〔共通事項〕を意識した授業展開を仕組むことにより、子ども達が〔共通事項〕を理解し、それを拠り所として音楽をつくったり聴いたりする力を高めることができるといえるだろう。また、音楽を研究教科としない小学校教員が音楽的レディネスを高める活動をどのように仕組んでいけばいいのかを明らかにすることにより、積み上げを図ることにつながるであろう。小学校教員と中学校音楽科教員の両者の必要性を概ね網羅できる授業を実践し、小学校音楽科における積み上げを図るための具体的方策を検討する。

3. 題材の提案

〔共通事項〕を意識した授業展開及び音楽的レディネスを高める活動を組み込んだ3つの題材を提案したい。これらは、アンケートの結果から課題とされた、音楽づくりと鑑賞の授業に焦点を当てて設定した。

対象校：山梨県内公立小学校。全校児童数60名弱、各学年1クラスの小規模校である。

対象児童：

- ・第5学年 13名（男子5名、女子8名、男女比4:6）
- ・第6学年 11名（男子6名、女子5名、男女比5.5:4.5）

対象期間：2015年4月～12月

（1）音楽づくりと鑑賞の関連を図った題材

○**題材名**：「音楽の仕組みを使って、まとまりのある旋律をつくろう」

①実施時期

山梨県小中学校音楽教育研究会「創作力くらべ」という作曲のコンテストが良い機会と捉え、9月から5,6年生と取り組んだ。音楽づくり5時間+鑑賞1時間の計6時間の題材を設定した。

②実施内容

音楽づくりと鑑賞の関連を図った題材構成にした。16小節の旋律づくりに意欲をもたせるようにした。旋律をつくる時は鍵盤ハーモニカを使い、個人で創作させることにより、個々の力を高めたいと考えた。5年生は、導入時期であるためハ長調に取り組み、6年生は、教科書でも学ぶイ短調の旋律づくりに取り組んだ。学習の流れについては、原田(2015)と同様である。創作にあたっては、歌唱の既習曲であるフォスター作曲の「静かにねむれ」で使われているA-A'-B-A'の二部形式を利用した。グループ内での発表会も含めて5時間で行った。見通しをもって試行錯誤しながら旋律をつくる場合には、最初にリズムづくりをして、次にそのつくったリズムに音階を付けていく方法がよいと考えた。

また、児童が取り組みやすいように、教材をパワーポイントで作成した。(図2) 旋律をつくる手立てがわかりやすくするようしたり、ワークシートと同じものを映し出して音を可視化したりするようにした。



図2 音楽づくりで使用したパワーポイント資料

さらに、感想カードを用意し、導入前と後では、どのように言葉が変化したかを見取れるような質問を設定した。(図3)

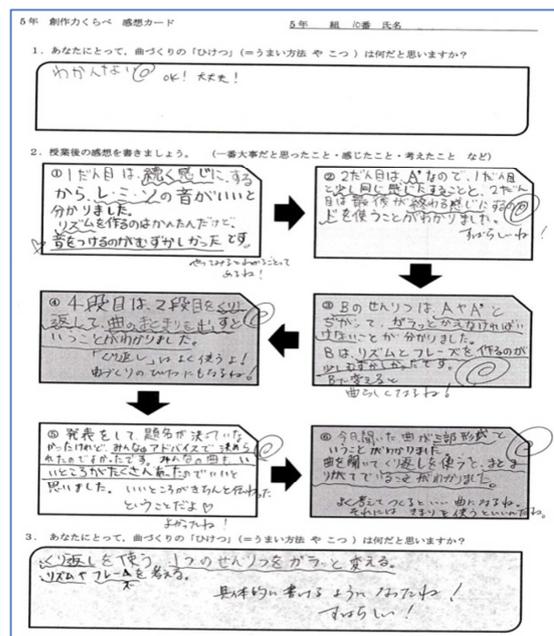


図3 題材を通して使用した感想カード

題材の最後である鑑賞の授業においては、前時までの音楽づくりで形式を意識するようになったことを生かして、曲の構成や形式がわかりやすい「ハンガリー舞曲第5番」を鑑賞曲に選んだ。旋律の移り変わりがわかるように、旋律が聴こえてきたら手を上げるように工夫したり、速度の変化がわかるように指

揮をさせたりして、耳だけではなく体で感じさせるようにした。旋律の移り変わりから曲想の変化を感じ取り、曲の構成を意識させるようにした。

③結果と考察

ア. [共通事項] の精選と多用させる手立て

[共通事項] を数個に絞り、焦点化させ、題材を通じて意識させたり活用させたりすることで、児童自ら音楽の言葉を進んで使い、さらに使用する頻度が増え、自分の表現するツールとして自分自身のものにしていった。原田 (2015) は、ペアやグループでの話し合いの場面で話し合いシートを活用した効果を挙げているが、それと同様、児童はお互いの作品を聴き合う際、絞った [共通事項] の視点で話し合いができ、意見を伝え合う場面を多く見ることができた。

授業者がねらいを定め、それを達成させるための [共通事項] を絞って提示したことにより、児童は [共通事項] や音楽の言葉を多用する学習の積み重ねを行った。児童らは、曲づくりにはBのような転換部をつくることも必要だということを理解し、曲づくりの知識の形成へとつながっていったと考える。

イ. 題材構成の工夫

「つづく感じ・終わる感じ」「反復・くり返し」「変化」「形式」など、音楽づくりで学んだ曲の構成に関わる音楽の言葉を、鑑賞した曲でもその視点で聴くことができるようになった。

曲づくりだけで終わるのではなく、新たに聴く鑑賞曲を音楽づくりで学んだ視点で聴くことができるかどうかで、教員も具体的な評価をすることができる。なお、音楽づくりと鑑賞で、同じ [共通事項] が設定できるようなものが望ましい。

題材構成の工夫として、今回は表現活動の音楽づくりの後に鑑賞を設定したが、鑑賞から入って、その鑑賞で学んだことを表現活動で生かしていく進め方も効果がある。また、

鑑賞→表現→鑑賞という、鑑賞で始まり鑑賞で終わるという進め方も、効果的である。

ウ. 音楽づくりとその評価

5年生はハ長調の旋律づくりを行い、「ドは終わる感じ」ということを理解できた。6年生はイ短調の旋律であったため、「ラが終わる感じ」「ソは#シャープにする」を意識して旋律をつくることができた。リズムを意図的に使い分けたり、フレーズの動き方を考えながら音の進行方向を決めていったりした。ある児童は「曲のサビになる部分だから音がずっと上がるようにつくりたい」という思いや意図をもって、上行進行の旋律をつくっていた。

最初にリズムづくりをして、その後その付けたリズムに音階を付けていく方が児童にとって混乱が少ない。児童がリズムと音階を同時に考えるのは、一斉授業では難しい。リズムづくりの際は、音符カードを用いると試行錯誤しながら、自分が納得する音楽づくりになるので効果的である (原田,2015)。

原田 (2015) は [共通事項] でもあるフレーズの形にも着目させて、どのような曲にしたいのか根拠となる音楽的要素を取り入れるようにしている。フレーズの形を意識させずに旋律づくりも設定できるが、フレーズを意識させない場合、児童らの作品の多くが平たんな旋律になりがちである。教師がどのような旋律をつくらせたいのか、教師自身のねらいがきちんと定まっていれば、自ずと使わせたい [共通事項] も見えてくるはずである。

評価については、毎時間ここまでできたらB評価、という規準を教師自身がきちんと設定する必要がある。例えば、音楽づくりの第3時で言えば、評価規準と評価の進め方を図4のように設定した。

児童に身に付けさせたい力は何か、どの程度理解させたいのか、または、A評価とB評価の違いは何かを明確に設定しておく必要がある。そのことによって、どのような指導支援が必要か見えてくるはずである。おおよそ

の児童が達成できるB評価をどのように設定するのかが重要であると考えます。

<p>評価規準（音楽表現の創意工夫②） ◇まとまりのある音楽になるように使う音やリズムを選ぶなど、自分の考えをもって旋律づくりを工夫している。</p>	
<p>OB評価「おおむね満足できる」状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前までの旋律と大きく気分を変えようと、音符やフレーズの形を選びながら旋律をつくっている。 音の進む方向を考えながら、つづく感じの音をつけている。
<p>OA評価「十分満足できる」状況（B評価にプラスして）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 旋律の流れを大事にしなが、思いや意図をもって音やリズムを選んで旋律をつくっている。 旋律が平坦だけではなく、音を幅広く用いており、上がったら下がり、下がったら上がるといったフレーズや曲の山場などを意識した旋律づくりを行っている。 フォルテやピアノ、クレッシェンドなどの強弱記号などを使い、より豊かな旋律にしようとしている。 友達と聴き合い確かめ合う活動を通して、友達が選んだリズムや音に対して、根拠をもって説明しながらそのよさを認めたり、新しいリズムや音、旋律を提案したりしている。
<p>OC評価「特別な支援が必要」な状況と考えられる児童への対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> a4-a'4-b4までの構成がつかめない場合は、「静かにねむれ」の二部形式をふり返らせる。 数種類の4拍のリズムカードを個別に提示し、前段とは違うリズムに音をつけていくようにさせる。 流れを大きく変えさせるために、前段までとは違ったフレーズの形を使ってつくれるようにする。パワーポイントのスライドを参考にさせる。

図4 評価規準と評価の進め方

(2) 器楽と鑑賞の関連を図った題材

○題材名：「曲想の移り変わりを
感じ取ったり味わったりしよう」

①実施時期

11月、5年生を対象に、「威風堂々第1番」（エルガー作曲）をリコーダーでの学習と関連させ、鑑賞の授業を設定した。器楽2時間＋鑑賞2時間の計4時間の題材である。

②実施内容

器楽と鑑賞の関連を図った題材構成である。鑑賞では、映像での鑑賞も行い、どのような楽器が使われているのか、聴くのみと違って新たな発見もできるようにした。また、実際に手を動かしたり体の一部を叩いたりしてリズムを感じ取らせたり動作を取り入れて速度の変化に気付かせたりするようにした。旋律の違いから曲想の変化を感じ取り、曲全体の構成を理解できるような場面も設定するようにした。

時	学習内容と活動
1 器 楽	1 題材の学習課題を知る 曲想の移り変わりを感じ取ったり味わったりしよう 2 「威風堂々第1番」リコーダー演奏曲を聴く ・楽譜の見方を確認する。 ・新出記号「フラット」「ナチュラル」を確認する。 ・リコーダーパートに階名をふる。 3 演奏 ファ#の運指を確認する。 ・演奏しにくい箇所を反復練習する。 4 遅いテンポで演奏する。
	1 本時における学習課題の確認 曲のつくりと表現の工夫を考えながら演奏しよう 2 器楽曲の構成を意識する ・曲の山場はどこかを考える。 ・構成を意識した表現の工夫を考える ・低音は「ト」、中音は「トゥ」、高音は「ティ」とタンギングすると美しい音色になることを確認。 3 味わいながら演奏しよう
3 鑑 賞	1 リコーダーで「威風堂々」を演奏する。 2 本時における学習課題の確認 曲想の移り変わりを感じ取ろう 3 「馬」「手」「旗」の旋律を覚える ・各旋律の楽譜を見たり、音楽に合わせて体を動かしたり手を叩いたりして曲想を感じ取る。 4 どのような順番で各旋律が出てくるか確認する ・音楽を流しながら、子ども達の反応を確認する。 5 曲想の移り変わりから曲の構成を考える ・「馬」「手」はA、「旗」はBととらえると、A-B-A'-Bという構成を理解する。 6 体を動かしながら通して聴く。
	1 リコーダーで「威風堂々」を演奏する。 2 本時における学習課題の確認 曲想の移り変わりを味わって聴こう 3 1回目と2回目の「旗」の違いを感じ取る ・2回目になると旋律の音が高くなったり、使われている楽器も増えたり、速度も遅くなったりしており、同じ「旗」の旋律でも曲想の違いを感じ取ることができるようにする。 4 全曲を通して聴く ・このあと、紹介文を書くことを知らせておく。 ・体を動かしながら聴いてもよいこととする。 5 これまでの学習を生かして、紹介文を書く。 ・Aの旋律の様子を書いたり、Bの違いを書いたりする。自分なりに感じた、この曲のよさについても書くようにする。
4 鑑 賞	

③結果と考察

ア. 鑑賞とその評価

鑑賞曲の特徴ある旋律に「馬」「手」「旗」という名前をつけること、そしてそれらの旋律に動作をつけることによって、児童は旋律を容易に覚えることができた。

曲の構成を考える場面で、「『旗』の旋律から曲の雰囲気ガラッと変わった。テンポが遅くなり、ゆったりした感じになった。だから、Bになる。」という児童の発言があり、旋律の移り変わりの様子から、曲の構成についての

考えをもつことができるようになった。

「手」の旋律は、細かな音符で音がリズムカルになっており、手拍子を入れると心地よい。「旗」の旋律は、CMでもよく使われている曲で、ゆったりと堂々と行進する雰囲気を感じ取ることができる。これらのように、旋律に動作をつけて聴くことにより、その旋律の特徴や雰囲気を感じ取ることができ、曲を通して聴いていても、この旋律（または雰囲気）はこの動作だ、と児童はすぐに動作を変えて表現することができるようになったと考える。どのような順番でそれぞれの旋律が出てくるかを確認したい時、それぞれの旋律を覚えていないと授業が進まない。各旋律の楽譜を提示させて音の動きを確認することも大切だが、音を聴いて自ら判断することも大切にしてほしい。その時の児童一人一人の様子を見て、きちんと聴き取ることができているかどうか評価することもできる。第3時では、「旋律の移り変わりをと感じ取る」ことができたならB評価としている。

本題材第4時で紹介文を書かせているが、原田（2015）は、紹介文を書かせることにより音楽的知識の形成につながっていると述べている。学習したことを多用させる機会を設け、自分の言葉として表現させる手立ても必要だと考える。

（3）鑑賞の題材

○題材名：

「音楽を形づくっている要素の関わり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴こう」

①実施時期

11月、6年生を対象に、教科書教材「木星」（ホルスト作曲）を鑑賞の授業を設定した。鑑賞2時間の題材である。

②実施内容

高学年では、曲全体の構成に気を付けながら聴くということが大切である。そこで、曲想の変化から、三部構成のつくりを理解させるようにした。旋律の移り変わりが理解でき

ているか教師が把握するため、各旋律が聴こえてきたら手を挙げるように工夫した。

〔共通事項〕の強弱、速度、リズム、音色の4観点で聴くようにして、児童に聴く視点を与えたこと、さらに、音楽を聴いて感じたことをイラストでお話づくりをさせたり、紹介文を書かせたりして、他者意識を持たせながら感じたことを伝えようとする手立てを講じた。

時	学習内容と活動
1 鑑賞	<p>1 題材の学習課題を知る 音楽を形づくっている要素の関わり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴こう</p> <p>2 4つの旋律を覚える 各旋律の楽譜を見たり、音楽に合わせて指揮のまねをしたりして各旋律の雰囲気を感じ取らせながら覚えるようにさせる。</p> <p>3 どのような順番で各旋律が出てくるか確認する 音楽を流しながら、子ども達の反応を確認する。</p> <p>4 曲想の移り変わりから曲の構成を考える ①～③の旋律はA、④の旋律はBととらえると、A・B・A'の三部形式という曲の構成を理解する。</p> <p>5 映像を通して、使われている楽器や音の重なりについても考えながら聴く。</p>
2 鑑賞	<p>1 本時における学習課題の確認 曲想の移り変わりを味わって聴こう</p> <p>2 音楽を聴いて、想像したことをイラストで描いたりお話をつくったりしてみる。 前時の学習を生かし、はじめ・なか・おわりの3つの思い浮かんだ様子を得意な方法でつくってみる。</p> <p>3 これまでの学習を生かして、紹介文を書く。 「はじめは○○で、次のなかでは◆◆で、おわりの部分では△△です。」という型を示して書きやすいようにする。 自分なりに感じた、この曲でイメージしたことや曲のよさについても書くようにする。</p> <p>4 この鑑賞曲をモチーフにした歌謡曲を歌う歌手の映像を観て、鑑賞曲をより味わって聴こうとする態度を養ったり、音楽を愛好する心情を養ったりできるようにする。</p>

③結果と考察

ア. 指揮をさせたり映像を観せたりする

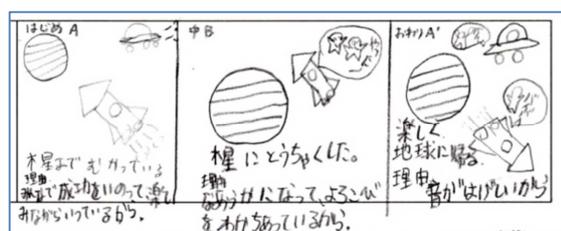
第1時では、はじめの③の旋律と中の④の旋律を取り上げ、同じ4分の3拍子だが速度の違いを理解させるために、児童に指揮をさせた。児童は、腕を振る速さの違いに気付き、容易に速度の変化を理解することができた。さらに、映像でも確認し、指揮者の手の振りの速さが変わっていることにも気付くことができた。

学習の最後には、映像を観させることも効

果的である。使われている楽器がどのような楽器があるのかオーケストレーションをつかませたい時や指揮者の棒の振り方＝速度の変化を感じ取らせたい時には有効である。音のみで聴いていても、どのような楽器を使用しているのか、既習楽器でも理解していない児童もいるので、実際に演奏している姿を観ることも、大切な活動だと考える。ただし、きちんと曲の構成や曲想の移り変わりなどの学習をきちんと理解した上での映像での確かめをした方がよい。なぜなら、その方が学習したことを確認しながら聴くことにもなり、理解と納得につながるからである。

イ. イメージした根拠を明確にする

第2時の曲を聴いて自分なりにイメージしたことを描く場面で、ある児童は次のように表現した。



曲の構成 B を「木星に到着した。理由は、なめらかになって、喜びを分かち合っているから」としている。また、終わり A' は、「楽しく地球に帰る。理由は音がはげしいから」としている。

木星に到着したイメージの根拠は、「(曲想が) なめらかに」になったからだ、音楽の雰囲気を表す言葉を用いて表現している。また、終わりの部分は「音がはげしい」ところを根拠として、地球に帰るというイメージをもつことができている。このように、感受したこととイメージしたことを、音楽の言葉を使って表現させていくことが、より豊かな表現活動につながっていくと考える。この活動を丁寧に積み重ねていくことで、より多くの音楽的な表現に使える語彙が増えていくと考える。

なお、上記の児童は、「なめらか」「はげし

い」といった言葉のみで表現しているが、ここで、[共通事項] の言葉である、音の『強弱』という表現もあると A 評価として判断できるものとする。

4. 全体考察

(1) 知覚と感受の往來の重要性

紹介文を書く場面では、鑑賞を通して感じたこと (= 感受) だけではなく、[共通事項] と関わらせて聴いてきたので、児童は知覚した音楽的要素を踏まえて書くことができた。

音楽科では、知覚と感受という言葉がよく使われる。知覚とは、はっきり答えられるもので、比較した時に人によって異なってはいけないものである。これは速さや音色など[共通事項] にかかわるものが多い。一方、感受とは、人によって解釈が多様であり、異なってもいいものである。静かで心地いいと感じる人もいれば寂しいと感じる人もいるだろう。感受は、形容詞的な表現を用いたものである。

「テンポが急に変わってゆっくりになったから、曲の雰囲気がおだやかになった。」という発言には、この2つの事柄が入っている。それは、二重線は知覚を表す言葉、波線は感受を表す言葉である。知覚と感受の言葉の順序は関係ないが、知覚と感受の組合せとなって交互に往き来することで、自分の思いや意図をきちんと相手に伝えることができる。

しかしながら、よく陥りがちな指導として、感覚的な言葉である感受の表現が先行してしまい、[共通事項] に関わる知覚の言葉で説明をさせないことがある。教員は、児童らの感受の言葉が聞こえたらならば、「どうしてそう感じたの?」と問い返しを行い、根拠となる知覚する言葉、[共通事項] などの音楽の言葉に立ち返らせる。そのことにより児童は、自分の言葉でなんとか説明しようとする。その経験を何度も行うことで、その言葉はより確かで強固となり、個人のものとして獲得していく。その言葉があるからこそ、きちんと

証明することができるようになる。うまく自分の言葉で表現できない児童は、友達の発言を聞いていくうちに「そう言えばいいんだ」と理解できるようにもなる。そのような知覚と感受の往来がある発表の仕方を小学校段階から積み上げていくことで、児童の表現がより豊かになり、また、鑑賞の力が高まってくると考える。

このような指導が行われるためにも、教員の〔共通事項〕の再認識と活用のための研究、また、鑑賞曲の楽曲分析及びスモールステップを意識した学習展開などの教材研究、さらに、具体的な指導法を学ぶことができる研修の場が必要であると考えます。

（２）楽譜や音符を丁寧に扱い読譜力向上へ

音符カードを用いてリズムづくりをしたり、つくったリズムをプリントに写したりして、個人で音符に触れる活動を積んでいった。音楽づくりだけではなく、歌唱、器楽、そして鑑賞でも、できる限り音符に触れる機会を設けることが、大切である。音符が分からないから音楽は嫌い、という児童がたくさんいるが、教員も児童と同じような姿勢であれば、そのクラスは、音楽嫌いの傾向がさらに強くなってしまふであろう。歌唱でも五線譜付きの楽譜を見ながら歌い、時には楽譜に立ち返らせ、この部分はどのように歌ったらいいのかということを読譜から読み取らせるという活動を積み重ねていったり、鑑賞では聴き取らせたい旋律の楽譜を提示しながら、音の動きを目で確認しながら音を聴いたりする場面を設定することもできる。このような活動を丁寧に積み重ねていくことで、読譜の力がつくことにつながっていく。

（３）音の可視化で音楽がわかるようになる

旋律づくりという高度な学習を一斉授業でできたのは、パワーポイントで音を可視化し、作業手順を明らかにしたからである。

これからの音楽科指導で特に重要だと感じているのは、音を可視化することだと考える。

音楽科では、音を通して自らの思いや意図を感じ交流していくが、音は目に見えず、消えてしまう。だから、教師は聴き取らせたい旋律は楽譜を提示したり、音符カードを使ったり、児童の作った作品をデジタルカメラやタブレット端末で撮影した画像をテレビ画面に映し出しながら発表させたりするなど、音を可視化した学習展開が望ましい。このような音を目で見ながら活動することで、児童らが今何について話し合っているか、どこをどのように工夫したらいいのか話し合う視点を明確にすることができるようになる。

音の可視化で、児童らの音符がわからないから音楽が嫌いという原因の解消と、中学校へ向けた音楽の基礎学力ともいえる音符の概念や読譜の力の向上などの積み上げにもつながっていくと考える。

（４）小中連携でより豊かな音楽活動へ

中学校教員のアンケートから、中学校教員の8割は小学校との連携が必要だと感じており、小学校でどのような作品をつくったのか知りたいなど、情報交換を望んでいる教員が多かった。

小学校教員からしてみると、実際に中学校側からの要請がないと、そのような意識も持たなかったり準備もしなかったりする。しかしながら、小学校教員も受け身ばかりではなく、中学校での豊かな学びにつながってほしいという願いを込めて、小学校でつくった作品を中学校教員に見てもらおうなど、中学校へ進んで作品を渡して引継をしようとすることも今後大切ではなかろうか。

中学校教員と小学校教員相互の小中連携の意識があれば、よりスムーズな連携ができ、中学校におけるさらなる豊かな音楽活動の展開が期待できると考える。

5. 引用文献

- ・原田弘昭 (2015). 鑑賞の力を高めるための知識の形成とその具体的方策 ―小・中学校における「音楽づくり（創作）と鑑賞」の授業を通して―. 平成 26 年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書, pp. 161-168.